
とある上条の学園生活

辿梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある上条の学園生活

【Nコード】

N7931M

【作者名】

辿梓

【あらすじ】

とある魔やとある科の登場キャラたちが一つの学校で繰り広げる学園生活 友情あり？青春あり？恋愛あり？の日常を駆けめくります

設定（前書き）

作者の初作品です

口調や一人称が間違ったりするかもしれません

作者は上条さんが大好きです

設定

禁書のキャラ達が同じ学園都市で勉強したり・青春したり・恋愛したり
のドキドキ学園生活wwwです

学園設定

学園都市・・・というよりも一つのマンモス校で、学生は全員その
学校に一緒に通っています

小等部・中等部・高等部・大学・職員棟など、敷地
の中に全部あります

教室は魔術師・能力者で分かれます

寮は男子寮・女子寮に分かれています

寮では魔術師と能力者が同室になったりします

Lv・成績で部屋の質が変わります

二人部屋です

キャラ紹介

【上条当麻】

イマジンブレイカー
能力：幻想殺し

レベル0
Lv：無能力者

高校一年生

【禁書目録】 Index - Librorum - Prohibito
rum

ヨハネのペン
能力：自動書記

魔法名：Dedicator 545（献身的な子羊は強者の知恵を守る）

中学二年生

【御坂美琴】

能力：超電磁砲
レールガン

Lv：超能力者
レベル5

中学二年生

【一方通行】 アクセラレータ

能力：ベクトル操作

Lv：超能力者
レベル5

高校一年生

【浜面仕上】

Lv：無能力者
レベル0

高校一年生

【土御門元春】

魔法名：Fallere 825（背中刺す刃）
オートリバース

能力：肉体再生・陰陽術

Lv：無能力者
レベル0

高校一年生

【姫神秋沙】

ディーブブラッド
能力：吸血殺し

「原石」の一つ

高校一年生

シスターズ
【妹達】

レディオノイズ
能力：欠陥電気

Lv：2～3

御坂のクローン

中学二年生

ラストオーダー
【打ち止め】

レディオノイズ
能力：欠陥電気

Lv：3

小学五年生

【風斬氷華】

カウンターストップ
能力：正体不明

高校一年生

【ステイル「マグヌス」

魔法名：Fortiss931（我が名が「最強」である理由をここに証明する）

能力：ルーン魔術

中学二年生

【神裂火織】

魔法名：Salvare000（救われぬ者に救いの手を）

能力：天草十字教

聖人

高校三年生

最後に

シスターズ
妹達が普通に学園生活を送っています

土御門はスパイではありません

このほかにもバンバンキャラを出しておいきたいと思っています

設定（後書き）

亀更新ですが、よければ見てやってください

妹達はLv5大量生産のために生み出された結果、無理だったので誰一人殺されることなく学園生活を送っています

土御門は魔術師に能力は仕えるのかという実験のせいで魔術も科学もできません

最後に、作者は上条さんが大好きです

上条の不幸〜第壱話〜（前書き）

設定つけくわえ

寮は学校の敷地の外にあり、敷地の外にはお店などがあります

それと学園都市の中は科学がもちろん進んでいます

上条の不幸〜第壱話〜

午後七時：学園都市

ここは東京の約三分の一のでかさをほこる周りと隔離している都市
現代科学の何十年と進んでいる科学都市でもあり

総人口の八割が学生で、その全員が能力者か魔術師という学園都市
でもある

能力者は脳を開発し、カリキュラム授業を受け

魔術師は基礎を学びそこから独自の魔術を開発していくということ
をしている

その都市で二人の人物が壮絶な鬼ごっこを繰り広げている

一人は黒髪のツンツンヘアー上条当麻

「待ちなさいよっ!」

そういつて追いかけるの学園都市に七人しかない超能力者（Lv
5）の第三位

御坂美琴

「誰が待つか!大体いきなり電撃を食らわすなんてどういう神経し
てんだよ!」

「つつつつさいわね!アンタが無視するのが悪いのよ」

「だから気づかなかったんだって」

「気づかないアンタが悪い！」

そういつて御坂が電撃を飛ばしてきた

「だから危ないっての！つてか上条さん死んじやいますよ！」

それを右手で防ぐ上条

「別にいいじゃない。どうせアンタにはきかないんだから」

「きかないからって普通人にそんな電撃を食らわせようとは思えねえだろ！」

「うつ・・・うつさい！黙って食らってればいいのよアンタなんか」

「ひどっ！それは人としてどうかと上条さんは思いますよ、ビリビリ」

「なっ・・・ビリビリいうなあっ！！！」

そして御坂が自分のポケットの中にあるコインを取り出そうとしたときに

「おっ！こんなところで何しとるん、かみやん」

現れたのは上条の同級生クラスメイトの青髪ピースと

「どうせ、かみやんの事だからまたフラグでも立ててたんだにゃー」

同じく同級生クラスメイトの土御門元春だった

「なんやと！ズルイでかみやん。いつも一人でええ思いとるやないか」

「そうだぜ、今日なんか 遅刻してきたあげく、クラスの中で五つの指に入る巨乳女子の胸に顔をうずめたんだからにやー」

「だからアレは事故だったんだよ。わざとじゃないんだって」

二人の話に上条が言い訳をする

「うらやましいなあーかみやんは」

「いつつもいつつも不幸だーって言ってるわりにはフラグ建てまくりだからにやー」

「俺がいつフラグを建てたんだよ」

クラスの女子ほとんどにフラグを建てている奴の台詞とは思えない言葉を吐く上条に

「・・・ほお・・・なあ、かみやん」

「なっ、なんでせうか」

「ちょっと僕らと話しよか」

青髪ピアスは激怒したようだ

「いや、お前等のは話し合いって言わないからな。それはリント」

いいから来るんだニャー」

そういつて上条が逃げ出そうとしたところをいつの間近づいたのか土御門が右腕を掴んで逃げないようにすると

「どこに行くんや？かみやん」

青髪もそれに便乗して上条の左手を掴んだ

「さっ。話は寮についてからじっくりと聞かせて貰いませよ」

「覚悟するんだぜ、かみやん」

二人は最高の笑みで上条をひきずりながら連れ去っていく

「つつはなせえ~~~~っ!!」

それに上条は抵抗するが、男二人、しかも自分より体格の良い二人に掴まれているのでビクともしない

「往生際がわるいぜよ。かみやん」

「観念するんやで。かみやん」

「ああ〜もうつ！不幸だあ〜っ!!!!」

そういつて今度こそ上条は二人に連れ去られてしまった

「どうして、こうなるのよお・・・」

そして、最初に上条と鬼ごっこをしていた御坂はただただ上条が連れ去られていく様子を見ているしか出来なかった

上条の不幸〜第壱話〜（後書き）

はい、第壱話です。まったくもって意味が分かりません。

でも、この小説は彼等の日常を書くことなので多分いいと思います

作者はデルタフォースが大好きです

そしてヒロインは美琴か姫神しか認めないというね、とんでもない作者ですね

なので魔術サイドの面々はそんなに出てこないかもしれません

それでは、こんな文才も何もない小説でよければ是非読んでやって下さい

それぞれの朝（男子寮）（第弐話）（前書き）

第弐話の翌日です

寮は二人部屋です

男子

浜面・上条

垣根・一方

青髪・土御門

ステイル・エツアリ

女子

インデックス・御坂

姫神・吹寄

風斬・神裂

打ち止め・妹達

のペアで部屋が分かれています

妹達は只今療養中なので都市内には十人程度しかいません

寮には食堂があり、皆そこでご飯を食べます

食堂は寮に住んでいるご飯を作る子が交代で作っていきます

それと、風呂というよりも大浴場があり、そこで風呂に入ります
個室はありません

それでは本編へLet's Go

それぞれの朝（男子寮）／第弐話

午前七時：男子寮

そのとある部屋に寝ている上条を起こそうとする影があった
その人物は浜面仕上、上条と同部屋で同級生でもある

「おい。起きろ、上条」

「ん~~~~後十分」

「いや、もう七時だからな、起きないと遅刻するぞ」

「.....後五分.....」

「おい.....たく」

そういつて上条の寝ている布団を

「早くおきやがれっ!!!」

剥ぎ取った

「うおっ！何すんだよ浜面」

「起きないお前が悪い！ホラ早く行くぞ、さっさと着替える」

「う~~~~分かった.....」

そういつて自分のベッドから立ち上がり服を着替え始める上条

「眠い……………」

「お前が遅くまで起きてるのが悪い！」

「仕方ねえだろ！昨日はあいつ等から逃げてたんだから」

そう、昨日上条が土御門と青髪に連れ去られていった後、なんとかそこから逃げ出した上条は二人から追いかけられたのだけれども、逃げれば逃げるほど追いかけてくる人数が増えていった、という恐るべき事態になった

その後、生き抜いた上条が帰ったのは深夜だった

そして風呂に入って寝るときにはもう午前三時だった

「お前がフラグを建てるからだろ……」

「年齢と彼女いない暦が同じな上条さんがいつフラグを建てたんですか！」

「……そんな事言うから追いかけるんだよ」

「何だと！だいたい、追いかけられるべきは俺じゃなくてお前だと上条さんは思っんですけど……」

「は？何で俺が追いかけれなきゃいけないんだ？」

「……………滝壺……………」

「!?!?」

「俺知ってるんだぜ。お前が滝壺って子とメールしたり電話したりしてるの」

「なっ・・・なんで・・・」

「いやな、そんな嬉しそうな顔で電話で話したりしてりゃ誰にだって分かるって」

「なっ・・・」なんやと、まさか裏切ったんか浜面」

そっいつて部屋のドアをブチ破ったのは青髪ピースと

「お前は俺らと同士だと思っていたのに・・・」

土御門元春だった

「さあて、その滝壺ってのはどこのどいつなん? 浜面くん」

そっいつて浜面に一歩近づく青髪

「大丈夫だぜ、質問に答えてくれれば学校には間に合うにゃー」

そっいつて浜面の逃げ道をふさぐ土御門

「うっ。上条助けてくれ!」

浜面は上条に助けを求めた

「あつ、俺飯食ってくるけど、土御門たちはくったのか？」

上条は浜面が助けを求めるのを華麗にスルー

「おうつ！今さっき食ってきたんだぜ」

「早いなあ」

「昨日、風呂入ってなかったから朝風呂もかねて早く起きたんよ」

「フーン、じゃ俺飯食ってくるわ」

「「いつてらっしゃーい」「」

――――
男子寮食堂

「お。意外と少ないな」

上条は食堂に入って自分の朝飯を今日の食堂当番の人に貰ってあいている席についた

「朝から豚カツって……………」

今日の朝飯は豚カツだった。

そして上条が黙々と朝食を食べていると

「よおレベル0」

上条の同級生の垣根提督と

クラスメイト

「よオ最弱」

同じく同級生の一方通行がそこに居た

クラスメイト

アクセラレータ

「おはよう、垣根に一方通行俺より遅いなんて珍しいな」

いつもは上条より早く起きる二人は、寝坊したらしい

「一方通行が起きなくてな……」

「ンだよ、俺は眠かったンだよ」

「はいはい、二人とも喧嘩するなよ」

そういつて食べ終わった食器を返却した

「さて、じゃあ俺は飯食ったし行くわ、二人とも喧嘩すんなよ」

そういつて上条は食堂を後にした

「ほれほれ、さっさと吐くんや」

「うあっ……ちよっ、やめっ……」

「にゃー。浜面、早くしゃべったほうが身のためだぜ」

「だか・・・ら、やつ、めろ・・・って・・・」

「やめて欲しいんならさっさと吐けばいいんやでゝなあつつちー」

「そうだぜ、浜面。お前がさっさと話してくれればこんな思いはしなくてすむんだにゃー」

「だれっ・・・がつ、はっ・・・っすか・・・」

「それは残念だにゃー」

「そやね、それじゃ。可哀想やけど・・・これ使おうか」

と、どこから取り出したのかわからないソレを浜面に見せ付ける

「なっ・・・それは、っや・・・つめ・・・」

とたんに青ざめる浜面

「それじゃあな、浜面。お前との日々楽しかったぜ」

「浜面・・・お前のことは忘れへんで・・・」

そいつって浜面にとどめを刺そうとした時に

「お前等何してんだよ」

呆れたように上条が入ってきた

「かつ・・・かみじょく助けてくれ」

と。情けない声で上条に助けを求める浜面

「・・・一体なにやったんだよ、青髪に土御門」

二人に上条が問いかける

「別にたいしたことはしてへんよ」

「そうだぜ、かみやん。俺らはただ質問に答えてくれない浜面にお仕置きをただけだぜ」

「お仕置き・・・って？」

「ああ、たいしたことないでー。ただ、ちょっと寝技をかけさせてもらっただけだ」

「寝技？」

「そうだぜ、ま。正固めやいろいろとやっても全然吐こうとしないからちよつと体に訊こうとしたただけだニヤー」

「体についてどうやってだ？」

「ん？ここにある釘バッドで・・・もういい分かったからもうやめろ」

「なんや、かみやん。大丈夫やで、殺さへんから」

「そうだぜ、かみやん。ただ死にたいけど死ねないような痛みを味あわせるだけだからにゃー」

「お前等二人とも怖ええよ！」

「ま、そういう訳やからさっさと浜面をよこしいや」

と、いつの間にか浜面は上条の後ろに隠れるように身をうずめていた

「そうだぜ、かみやん。邪魔をするんだったら、かみやんでも容赦しないぜよ」

「ちよつ待てつて、ホラ、もうこんな時間だし、早くしないと遅刻するし、なっ？」

そついつて何とか話をそらす上条

「なんやと！それを早く言いなやかみやん、遅刻なんかしたら子萌先生が泣いてしまうやろ・・・いや、子萌先生の泣き顔もええなあ・・・」

などと青髪が妄想をし始めた

「はあ、仕方ないにゃー。子萌先生に泣かれるのも困るし、仕方ないからここまでにしといてやるぜよ」

「はいはい、じゃ鞆もってこいよ。一緒に行こうぜ」

「おkだぜ。じゃいくぜ青ピー」

そういつて土御門と青髪は自分の部屋に戻っていった

「それじゃ、浜面も早く用意する」

「おう、分かった」

そして上条も鞆を用意すると

「かみやーん。いくでえー」

と、青髪の声が聞こえた

「分かった今行く。ホラ、浜面早くしろ」

そついつて四人で学校へ向かったデルタフォース＋・・・しかし、
彼等はしらなかった。

この先学校であんな事がおこるなんて・・・

それぞれの朝（男子寮）〜第弐話〜 （後書き）

さて、最後に妙な伏線を張ってみたわけですが・・・次の第参話はそれぞれの朝（女子寮）です

なので学校の話は四話になると思います

それでは、こんな文才もない小説を読んでくれてありがとうございます
ございました

出来れば次話も読んでくれると嬉しいです

それではそれぞれの朝（男子寮）〜第弐話〜

おしまいです

それぞれの朝（女子寮）〜第参話〜（前書き）

式話まではスラスラ書けるんだけど、それからがなあ〜・・・
なんてwww文才のない作者ですいません

さて、前書きも面倒になってきたので
本編へGO!!!

それぞれの朝（女子寮）／第参話

午前6：00 女子寮in食堂

「うつうつうつ・・・まだ眠いんだよ短髪うゝ！」

女子寮の食堂で眠いと言いながら大量に朝ご飯を口の中に運んでい
るのは禁書目録インデックス

本名はIndex・Librorum・Prohibitorium

「そう言ってる割にはしっかりと食べてるじゃない・・・」

そして禁書目録が短髪といった相手とは、上条にビリビリと呼ばれ
ている能力者の第三位超電磁砲こと御坂美琴レールガン

「それとこれとは別なんだよ！短髪！」

「それでも食べすぎよ・・・後、短髪っていうな！」

朝からハイテンションなヒロインのお二人です

そしてそんな二人に近づく影が・・・

「おはようございますと、ミサカはお姉さまと、オリジナル禁書目録に挨拶を
します」

「ミサカはミサカはおはようって、二人に挨拶してみる」

二つの影というのは妹達シスターズの一人と打ち止めだラストオーダーった

「二人ともおはよう！早くしないとご飯なくなるんだよ」

ご飯がなくなったら間違いなく禁書目録のせいなのだが……ま、食卓は戦場といえますからね

「そうですね、それではお先に、ミサカは上位固体より早くご飯を取りにいきます」

「あつ、ズルイー！ってミサカはミサカは下位固体を追いかけてみる」

その後喧嘩しながらもご飯を取ってきた二人は御坂たちと同じ席に座る

「それにしても……同じ顔がこつと並ぶと不気味を通り越して笑いが出てくるよね」

と、無邪気に笑いながら言う禁書目録さん

「むう……お姉さまと下位固体は似てるのは分かるけど、ミサカはミサカは似てないよ」

いえ、すつごくそっくりです

さて、朝ごはんを済ませて食堂から出るとそこには風斬・神裂・姫神・吹寄の四人組があるところで悩んでいました

「それで、如何してこうなったの？」「いえ、私が来たときにはもう既に……」「そう。でも。それじゃ犯人は……」「だれなんでしょうか……」

ちなみに左から吹寄　神裂　姫神　風斬の順番です

「みんな、そんなところで何やってるの？」

御坂が尋ねると皆がそちらのほうを向く

そして口を開いたのは神裂だった

「いえ、実は洗濯機の中が……」

「洗濯機の中？」

御坂と禁書目録の声が綺麗にはもった

「洗濯機の中のもの……というか、その……服が……ないんですよ……」

「へ？」

またもや御坂さんと禁書目録さんの声はもった

「まあ、見てみれば分かりますよね」

そういつて神裂が洗濯機のふたを開けて、そこを二人は見た

そこには、何もなかった。

文字通り何も入ってなかった

「ないって言うことは盗まれたのかも……」

などと禁書目録さんがいつもより真面目な顔をしていつている

「いや、でもさ。洗濯物がないって言うこともありえるんじゃないの？」

御坂が言つと

「それはないわ。寮で人数が多いから洗濯物がないことはほとんどない。というよりも洗濯物がたまるほうが多いわよ」
それに吹寄が言う

「だったら、・・・盗難ね」

「・・・やっぱりその可能性が一番高いですよね・・・」

と、六人が言っていたときに

「あらあら、六人ともいいんですの？まだ居て？」
と、

話しかけてきた彼女はオルソラ「アクイナス、ちなみに今日の朝ごはんは彼女が作りました

「どういうことですか？」

神裂さんがオルソラさんに聞きます

「どうしたも、こうしたも・・・もう出ないと遅刻してしまいますよ」

そのオルソラの隣にいた五和が答える

それを聞いた六人はあわてたように学校に行く準備をした

まあ。その後は洗濯機のことをオルソラと五和に話して学校に彼女達は向かった

――――
通学中

「やっぱり、あの洗濯機の中には洗物が入っていたみたいですね
さきほど、オルソラと五和に聞いたらしい神裂が言う

「じゃ、盗難は100%決定事項になるわけだ」
それに付け足す吹寄さん

「でも、犯人は誰かしらね？」
疑問を口に出す御坂さん

「女性が女性の下着を盗むわけないから。十中八九。犯人は男」
理屈を述べる姫神さん

「でも、だったら犯人はどうやって、盗んだんでしょうか？」
疑問を口に出す風斬さん

「ううー。女の子の下着を盗むなんて許せないんだよ！」
名も知らぬ犯人に怒る禁書目録さん

「そうね、確かに盗むなんて最低ね」
「犯人を見つけたら半殺しにします」
などと、いつていると

「でも、犯人が誰だか分かりませんよ？」
風斬さんが疑問を口にする

「そうね。この際。男子全員に話でも聞いてみたらどう？」
姫神さん

「確かに・・・そうすれば犯人が分かるかもしれません」

「でも、当人達が嘘をつけば分からなくなるわよ」

「……ま、一応は聞いておいて頂戴」

そう吹寄が言つと皆肯定して

後はどうやって聞きだすか？などの話で盛り上がりながら通学をした

それぞれの朝（女子寮）／第参話／（後書き）

はい、参話終わりました。それでは次回第四話

やつと学校に行きます

やつとですよ。てかそれよりもキャラの口調がそんな分らないんですよねww

ま、仕方ない。なんてったって自分が書いたからな・・・自分で言つててむなしくなりました

それと「オオカミさんと七人の仲間たち」というアニメを見てはまつてしまい、原作全巻買いましたwww

とてもおもしろかったので小説書こうかなと、思っています！

はい、「参話までしか書いてなくて、しかも素人の癖に何いってんだデメエ」と思う方もいると思います

というか作者本人が思っています

なので、書くかどうか迷っているのですが・・・

ま、当分は禁書目録に専念することにします

それでは第四話でお会いしましょう

学校の朝〜第肆話〜（前書き）

はい、更新遅くなってすいません

宿題が、夏休みの宿題のせいで・・・

ま、宿題も全然終わってないんですけどね

それでは、めんどくさいのでさっさと本編へLet's Go

学校の朝〜第肆話〜

ここは学園都市に一つしかない巨大な学校の高等部のある教室だ
そこで、上条当麻・土御門元春・青髪ピアス・浜面仕上の四人が言
い争いをしていた

「だから！やっぱ一番は「黒」だっつてんだろ！」

「かみゃん、それは違うぜ。やっぱ一番は「白」に決まってるにや
ー」

「何言うとるん、つつちー。一番は「縞」にきまつとるやないか。
浜面もそう思っやろ」

「そうだな・・黒も捨てがたいが「紫」とかもいいな」

「紫やと！ソレは浮かばんかったわ。」

「さすがバニー好きなだけはあるな」

「バニー関係ないだろ！」

「そうだぜい、バニーといえば白に決まってるにゃー」

「何言ってんだよ！普通は黒だろ！」

「二人ともなに言うとるん。バニーガールは赤が最強や！」

「バニーは黒に決まってるんだろ！」

「ホラ！浜面だって黒だって言ってるじゃねえか！」

「二人ともおかしいで！赤に決まってるやないか！」

「だからバニーといったら白ウサギに決まってるんだろボケが！」

「何やと！大体つつちーが白がいいって言うのはロリに似合うからバニー自体は白じゃなくてもええんちゃう！」

「それが真実なんだにやー。この偉大なるロリの前ではレオタードだろうがスク水だろうが、そういった衣服の属性はかき消されてしまっただぜい。つまり、ロリは何を着せても似合うのだからバニーガールだってロリが最強ということだにやー！！！！！！！！！」

「このロリコン軍曹が！何でもぺたぺたにしゃがんで、そんなにロリが好きなら小等部にでも行ってきやがれ！！！」

「それがな、かみちゃん。小等部の警備って厳しすぎて入れないんだにやー。なあ、青ピ！」

「そうやな、警備員が出てきたときにはマジでどうしよか思たわ」

「マジで入ろうとしたのかよ・・・」

入ろうとしたことがある二人の事実ドン引きする上条と浜面

「言っとくけどな。僕らだけで行ったんやないで」

「そうだけい。なんと、あの一方通行も一緒だったんだにゃー」

「「アツ・・・一方通行が！！！！！！」」

「そうなんだぜい。ラストオーダー打ち止めに会いに行かないか？って誘ったら文句を言いながらも付いてきたんだにゃー」

「文句をいいながら付いてくるから、どこのツンデレや！と思うてしまったんやで」

「一方通行って・・・ロリコンだったのか・・・」

と、浜面が驚きの声を出したときに

「へエ・・・誰がロリコンなんだ？」

一方通行がいつの間にか浜面の後ろに立っていた

「一方通行・・・いつからそこにいたんだにゃー」

「あア、テメエらが黒だの白だの紫だの、意味分かんねエこと言ってる時からだよ」

（（（（ほとんど最初っからじゃねえか！！！！！！））））

「それで、その黒だの白だのって言い争っていたのって何の話してたんだ？」

と、いつの間にか垣根提督まで話に入ってきた

「……最初は上条と土御門が【下着は黒と白どっちが最強か】を言い争っていたら……」

「……青髪が「縞もええもんやでー」的なことをいつてきて……」

「そのあと浜面が「紫もいいな」って言ってきたんだぜい」

「そんで、なぜかバニーガールの話になったんや」

と、四人が二人に解説してやると

「「お前等馬鹿だろ」」

と、二人が呆れたように言ってきた

「何だよ！お前等が何話してたんだ？って聞いてきたから答えてやつたのに！」

「その言い方はあんまりじゃないかにやー」

「そうやで、第一かみゃんや浜面は分かるけど！僕が馬鹿なのは納得いかへんで！」

「おいまて、確かに上条は分かるが俺まで馬鹿なのは納得いかねえぞ！」

「おい！俺が馬鹿つてのが分かるってどどういう意味だよ！」

「「「「「言葉通りの意味だろ」「」「」「」」

上条の言い分に一方通行や垣根までもつつこんだ、上条に100のダメージ

「なっ……さすがの上条さんでもコレは傷つくぞ……!」

と、めげずに言い返すが

「事実なシだから仕方ねエだろ」

「本当のことなんだから仕方ないんだぜい」

「真実やから仕方ないんや」

「仕方ないんだよ、上条」

「それが事実だからな」

と、またもや五人で上条に（精神的）攻撃。上条の精神に150のダメージ

「もう、いいよ！そうだよ、どうせ俺は馬鹿ですよ！頭悪いよ！馬鹿で悪いか！」

「ワリイな。」「悪いにゃー」「悪いで」「悪いな」「ああ、悪い」

上条が開き直っても五人の精神攻撃はとまりません

「っ……馬鹿の何が悪いんだよ……!」

「馬鹿なことがだぜい」

「そうやでかみゃん、よく言うやないか。馬鹿は死んだほうがいいって」

「言わねえよ！大体、それは俺に死ねっていつてるのか！死んだほうがいいって言うてんのか！」

と、上条が反論すると

「うっさいわよ上条！朝っぱらから大声だすな！」

いつの間にか現れた吹寄からの頭突きをくらってしまった

「なにすんだよ！吹寄」

「あんた等がうっさいからよ！」

「だからって頭突き食らわすことねえだろ！」

「朝から騒いでいる貴様が悪いわ」

「騒いでたのは俺だけじゃねえよ！」

「どうせ元凶は貴様なんですよ」

「そうやって決め付けるのはよくないと上条さんは思います」

「事実なんだから仕方ないでしょう」

「事実じゃねえよ！！！」

と。吹寄と上条が口喧嘩を始めてしまったとき

「二人とも。少し。落ち着いて」

姫神が現れて二人の喧嘩を止めた

「吹寄さん。今朝のこと。忘れてない？」

と、姫神が吹寄に尋ねると、吹寄はハッ！！としたような表情になる

朝というのは女子寮の洗濯物が盗まれた騒ぎのことですね
確か、男子全員に話を聞くと聞いていましたね

「そうね、忘れてたわ・・・ありがとう、姫神さん」

「別にいい。それよりもこの際だから上条くんたちに聞いてみる？」

と、実はこの二人はまだ誰にも話を聞いてなかったりします

「・・・そうね、この際だし聞いちゃいましょう」

そういつて上条たちのほうを向いて

「ちょっと聞きたいことがあるから、少しいい？」

「えっと・・・俺等全員？」

聞いたのは浜面だった

「ええ、貴様等六人に聞きたいことがあるの」

「・・・別にいいけど聞きたいことってなんだ？」

「・・・実は・・・『キンコンカーンコン』
吹寄が上条たちに聞くまえに予鈴がなってしまった

「・・・姫神さん・・・」

「わかった・・・」

「上条」

「なんだ？」

「今日の昼休みに屋上ではなしの続きをするから昼休みに屋上に来てくれる？」

「いいけど、俺今日は購買なんだけど・・・」「俺もだぜい」「僕もや」「俺も」「俺もだ」「俺もなんだが」

つまり全員購買なんですな

「いいわ、購買でパンや何か買ってからきて頂戴」

その様子に呆れたように返す吹寄

「それじゃ、あと少しでHR始まるから貴様等も早く席につきなさいよ」

そういつて吹寄と姫神は自分の席に戻っていった

「それじゃ、俺らも子萌先生が来る前に席につくか・・・」

そういつて男六人も席に戻っていった

学校の朝〜第肆話〜（後書き）

駄文でもうしわけありませんでした

ほんつとくに文才がない駄文ですよ
誰か文才を分けてくれー

五話は犯人探してもやるつもりです。

さあて、誰が女子寮の服を盗んだんでしょうかね
w w w w w

それでは、できたら五話でお会いしましょう

捜査協力〜第伍話〜（前書き）

さあて……すっげえ久しぶりの投稿ですねwww

まあ、これは全て私の文才のなさがいけないんです

反省はしていませんが後悔はしています

最悪ですね

それでは本編へどうぞ

捜査協力〜第伍話〜

ここは学園都市に一つしかない学校の高等部、の屋上だ

只今の時間は昼休み

上条たちは、購買の激闘の末に勝ち取った戦利品パンやジュースを手に、朝吹寄と姫神に言われたとおり屋上に来ていた

まあ、激闘の際に上条がまたフラグを建てて、周りの男子生徒から殺氣の目を向けられたのはここでは省略ということで

屋上に、吹寄と姫神は弁当を持って来ていた

ちなみに、二人はルームメイトなのでお弁当は姫神が毎朝作ってあげている

「わりい、待ったか？」

「大丈夫よ、それにあたしたちが頼んだんだから少しくらいは待つわ」

「それで、俺らに話ってなんなんだぜい？」

「話。というより相談に近い」

「相談？僕等に相談してもなんも解決にならへんと思うで」

「そんなことない。私たちより何か知っていると思う」

「で、その聞きたいことってのはなんなんだア？」

「話すときから、昼食を食べながら話すわ」

そういつて各自その場について、上条たちはパンやジュースを頬張りながら二人の話に耳を傾けた

十分後

「……という訳なのよ」

十分後……ようやく二人の話が終わった

「えっと……つまり」

「朝起きて食堂でご飯を食った後」

「洗濯機の前にねーちゃんと風斬がいて」

「二人に話しかけて、どうしたのか聞いてみると」

「寮の洗濯物が消えていたんやな」

「それで自分達で犯人を見つけ出そうと、オレらに話を聞いてみることにした」

「・・・ということか？」

上から上条・浜面・土御門・垣根・青髪・一方通行・上条の順番です

「ええ。そういうことよ」

「でもさ。そんなだったら風紀委員と警備員ジャッジメント
アンチスキルに頼めばいいんじゃないの？」

上条が吹寄に質問すると

「なっ！？／＼それは、その・・・」

と。その上条の言葉に赤くなり、しどろもどろになる吹寄

その表情で上条以外の全員が察したが上条は頭に？マークをつけている

「なあ。何で吹寄はあんな顔真っ赤にしてんだ？」

「かみやん・・・少しはデリカシーってもんを考えるんだにゃー」

「デリカシー？意味がわかんねえぞ土御門」

「やつぱ、かみやんは馬鹿やな」

「馬鹿じゃねえよ！」

「いや、上条、お前ちゃんと二人の話聞いてたか？」

「聞いてたけど。わかんねえんだよ！」

「じゃア、ヒントをやるから、当ててみる」

「ヒント1、盗まれたものは洗濯物だ」

「それは、二人が言っただじゃねえかよ」

「ヒント2、洗濯物の中には下着があるんだぜい」

「洗濯物だからあたりまえだろ」

「ヒント3、ジャッジメント風紀委員や警備員には男がいるんやで」
アンチスキル

「そりゃ、女だけじゃ駄目だろ」

その上条の反応を見てその場にいる全員が「はあ………」と深いため息を漏らした

「なんだよ！？分かんないものは仕方ないだろ！！」

「かみやん……さすがに鈍すぎるで……」

「そうだにゃー、さすがの土御門さんでもかみやんがこんなに鈍くて馬鹿だとは思わなかったぜい」

「まあ、馬鹿なのは上条だから仕方ないけどさすがにこれはな……」

「こんだけヒント出しても分からねエなんて……もうダメだな」

「よくそれで高校入学できたな上条……」

「貴様は、ほんつとくに馬鹿だったようね……」

「確かに。これは驚いた、」

と、男子のみならず女子にまでいいたい放題いわれ放題の上条

「なんだよ、もういいから教えるよ!!」

「馬鹿のかみやんに言っても分かるかどうか疑問やけど……ま、可哀想なかみやんのためや教えてあげるで」

「一々癪に障る言い方だよな……」

「事実なんやからしょうがないやろ。では、説明をどうぞ土御門さん」

「そこで何で俺になるんだにゃー」

「ええやん、減るもんじゃあるまいし」

「青ピーがかみやんに教えるっていったんじゃないかにゃー」

「いいからいいから、はよ、かみやんに説明したってや」

「うう……釈然としないんだぜい……」

と、文句を言いながらちゃんと上条に説明します

「――〜〜〜というわけだぜい、分かったかにゃーかみゃん」

「つまりは、男子生徒や教師に下着を見られる可能性があるから出来る限り自分達で探したいってことか？」

「まあ、そういうことだぜい」

「大体さっきのヒントで考えられるのはコレぐらいに決まってる」

「いや〜・・・吹寄だからそんな女らしい理由なわけがないと思つて・・・」

「なに、いうとるんかみゃん。確かに吹寄さんは「対カミジョー属性」+「男らしい性格」の持ち主やけど、それでも女の子なんやから、そりゃ下着を見られたくないやろ」

「そうだぞ、上条。いくら男らしいからって『一応』吹寄だつて女なんだぞ」

「まア、『一応』だけどな・・・」

と、男性陣にいわれ放題の吹寄制理さん

「・・・キサマ等・・・」

「「「「「「！！？」」「」「」「」

どうやら、吹寄の堪忍袋の緒も切れてしまったようです

「あたしが異性に下着を見られたくないと思うのがそんなに不思議か？」

といいながら自分のおでこをあげておでこ全開にする吹寄さん

「いや、不思議っていうか。意外っていうか……」

「そんなの吹寄のキャラじゃないっていうか……」
と、上条と浜面がいいわけする中

「仕方ないやろ、男子生徒にブラを見られても恥じらいもしなかったんやから」

「そうだけい。普通の女子生徒はなんらかの恥じらいってもんを持つはずなのに吹寄はそれが無いんだにゃー」

「……貴様等！いいからあたし達の洗濯物について知ってることを教えなさい！！！」

「吹寄おでこDXツツ！！！！！！！」

「吹寄さん。早くしないと。昼休みが終わる。」

「そつ、そうね。こうしてる場合じゃないわ。というわけで貴様等！何か知っていることがあるのなら今すぐにいいなさい！もし、嘘をついたらどうなるか……わかるわよね」

そういうと、上条たちは首を縦にふって、知っていることがないかどうか考えている

「オレは知らねエナ」

「俺も」「俺もだ」「ム力つくことに俺もだ」

と、一方通行に続き浜面、上条、垣根が吹寄に答えるが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

土御門と青髪の二人は冷や汗を流しながら黙ったままだった

「貴様等・・・何か知ってるの？」

「「いやいやいや」」

「お、おお、俺らが知ってるわけないやろ。なあつつちー」

「そそ、そ、そうだぜい。そんなこと知ってるはずがないんだにやー
ーなあ青ピー」

二人は否定しているが挙動不審＋冷や汗で何かをしていることは
二人の様子で分かる

「知っていることはちゃんと話して。」

と、姫神が自称魔法のステッキを取り出して二人を脅す

「いや、これは教えてはいけないんだにやー」

「そうやで、さすがに仲間は売れないんや」

二人は断固として口を開かない気です

「仕方ないわね、姫神さん。殺っちゃって」

「らじや。」

「フハハハ、美女からの攻撃ならドンと来いや！」

「清らしいほどのMっぷりだな」

「チツ、これじゃ青髪を喜ばすだけね。仕方ない、姫神さんアレもつてきて」

「らじゃ。」

そして姫神の手には一冊の本が握られていた

「フハハハハ！どんな手を使おうともぼくは絶対に口はわらへんで、なあつつちー」

「そうやで、俺らにはどんな手も通用しないぜい」

「フツ。笑ってられるのも今のうちよ」
と、吹寄は余裕そうだ

「じゃ、姫神さん後は、分かってるわね」

「大丈夫。」

そういつて姫神は上条たちのほうを向いて
「上条くん達、後ろを向いて耳をふさいで、耐性のないあなたたちではコレは危険すぎる」

そういわれた上条たちは黙ってその言葉に従う

「安心して。十秒も持たない。」

「やめて欲しければ。知ってることを全部話してね」

その瞬間

「ぎやアアアアアアアアアアアア亜あああああああアアア
アアアアア亜あああアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアああああああああああああアアアアアアアアアア
ああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアああああああああ鳴ああああ亜あああああ
ああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア」

――

ここで、姫神が二人に見せた本をご紹介します

自分と同じ同姓の男と男の恋愛モノをみせられる時点でも相当堪えるが、姫神が持っている本はR-18のもので、二人は男と男が絡み合っているシーンをみてしまったのだ

姫神さんが何故このような本を持っているのかというのは深く追求しないで下さい

「そうや、つつちー！目をつぶればあれは目に入ることはないで」

「そうだぜい、確かにすさまじい破壊力だが見えなければ怖くないにゃー」

そして二人は目をつぶった。

「まだ甘い。」

そういつて姫神は本を自分の懷に戻してヘッドフォンを二つ取り出し、二人にそのヘッドフォンをつけた

「ぐわああ鳴アアアアアアアアああアアアア
アアアアああああアアアアアアアアアアア
アアアアああああああ鳴ああアアアアアア
ああああアアアアアアアアアアアアアア
ああああああ亜アアアアアアアアアアア
ああああああああああああああああああ
ああああああ」

分かっていてる人かもしれませんが説明しよう
さて、

今、姫神が二人につけたヘッドフォンには「BLCD」という男と男の恋愛をCDにしたものをながしているのだ。

しかも $R - 18$ 、二人のライフは 0 に等しい。もう見てられないほどのありさまだ。

ちなみに、姫神さんが何故「B L C D」お持っているのかは深く追求しないで下さい

「わ、分かったにゃー。言うから早くこのヘッドフォンを外してくれ……」

「包み隠さず何でも教えるから、早くこのヘッドフォンを取ってくれ……」

そう、二人がいったので姫神さんは二人のヘッドフォンを取ってあげました

「さ、早く教えなさい。もうすぐで昼休みがおわっちゃうんだから」

「「じ、実は……」」

「隣の組の佐藤って奴が何かたくらんでいるらしいんだぜい」

「たくらんでいる、って何を？」

「僕等もよう知らんけど「手に入れたらお前等にも分けてやるよ」って言われたんや」

「手に入れたらってことはまだ手に入れてないじゃないか？」

「それがな、かみやん。今日の食堂で、「例のものが手に入った」ってオレラにいったんだぜい」

「そんな怪しいことしてたんなら何で言わなかったんだよ」

「まだ「例のもの」を見てへんから、洗濯物なのかどうか分からないんや」

「で、本当は？」

「まだ見てないのに没収されて堪るか！！！」

二人はその後、姫神の自称魔法のステッキで叩きのめされました

「まあ、いいわ。もう時間がないから放課後にその佐藤って奴のトコにいくことにしましょ」

「だったら皆に連絡してみる」

「そうね、あっそうだ、貴様等もちゃんと協力しなさいよ」
そういつて上条たちのほうを見る

「なんで俺たちまで？」

「万が何かあったときに貴様達の力が必要になるかもしれないからよ」

「御坂や神裂もいるんだから大丈夫だろ」

「いいから来なさい！！！」

「……はい……」

吹寄のあまりの迫力に、思わずうなずいてしまった上条たち

「それじゃ、放課後に学校の食堂に集合ね」
そういつて皆は教室に戻っていった

捜査協力〜第伍話〜（後書き）

久しぶりの投稿だったのでおかしいところがあったり、誤字脱字があったりすると思いますが。

ま、久しぶりってことは関係ねえんですけどね

しかし、意外とこれ長引きましたよ。

やっぱり途中でおふざけをいれてるからですかねwww

でも私はシリアスって書きたいけどかけないんですよ、ギャグも書けるかどうかわかんないんですけどねww

それでは次回は多分なんとか早めになるように努力します

いや〜中二の二学期は大変だ〜

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございます！
！！！！

作戦会議〜第六話〜（前書き）

イエイ！

やっと六話ですよ

でも六話なのにまだ一日が終わらないとかないわあ〜

あ、それとアイテムやグループの設定は後書にかいておりまーす

それでは！本編へLet's GO

作戦会議〜第六話〜

ここは学園都市に一つしかない学校の高等部の食堂だ

今の時間は放課後なので、食堂はがら空きだ

そこに上条当麻・土御門元春・一方通行・青髪ピアス・吹寄制理・
姫神秋沙の六人がいた

彼等は女子寮でなくなった洗濯物を探すために、吹寄に頼まれて（脅されて）、快く（しょうがなく）引き受けたのだった

ちなみに垣根提督は研究所に、浜面仕上はアイテムという部活動の仕事（主にパシリ）があるので今はいないのだ

「それにしても、遅いわね。御坂さんに禁書目録」
インデックス

「それに、風斬も来ないな」

「風斬さんは仕方ない。だって。今日は研究所に行ってるんだから」

風斬氷華、AIM拡散力場の集合体である彼女は、自分の存在を保つため、二週間に一回、研究施設で調整を行わないと上条たちとの学園生活を送ることが出来ないのだ

「でも遅すぎだろ。それに打ち止め（ラストオーダー）や、御坂妹だつてきてねえし」

「そうね、私達のHRが終わって、大体一時間は経ってるわ」

只今の時刻は午後五時過ぎ、今日は六時間授業だったので、普通は四時三十分以降にはHRが終わっている時間帯だ

「うちのHRが早すぎたんとちゃうん？」

「まあ。今日は子萌が出張だったから。早く終わったけど。これは遅すぎだと思う」

「そうだよな、もう、残ってる生徒なんて部活動生や風紀委員ジャッジメント以外にはいないんじゃないの？」

「もう、土御門さんは帰りたくなってきたにゃー」

「オレもだア」

「駄目よ！貴様等にはその佐藤とやらの居場所まで案内してもらわないといけないの！」

「案内ついても佐藤は男子寮にいるんやで」

ちなみに男子寮は女子禁制、女子寮は男子禁制になっています

「だから、貴様等には佐藤を男子寮から呼び出して欲しいのよ」

「じゃあ、携帯で呼び出せばいいじゃないか」

「携帯番号しってるはずないでしょうが」

「んじゃ、教えてやるぜい」

「女子からの電話なんて不審がられるに決まってるでしょ」

「いや、普通に女子からの電話がキターー（・・・）ー！とかお誘いキターー（・・・）ー！っていう感じに浮かれるに決まってるって」

「わかんないじゃない！」

「いや、分かるぜい。俺も男だから」

「僕もわかるで、男やから」

「ま、普通に女子から「今から〇〇にきて」とか言われたら、浮かれるよな」

「けど、メアドも知らねエ奴からかかってきたら、少しは疑うんじゃないの？」

「そんな些細なこと気にならない位に浮かれるにきまつてるにや」

「そうそう、それが男という生き物やからな」

「貴様等が馬鹿なことはよく分かったから・・・」

「馬鹿じゃないぜい」

「うっさい。それよりも待ち人がやつとご到着みたいよ」

その言葉にその場にいる全員が食堂の入り口に目を向けると

「遅れたんだよ」

「待たせてごめん」

「待たせてしまつてすいません。と、ミサカは謝つてみます」

「ごめんね、待った？つて、ミサカはミサカは聞いてみる」

「すいません。遅れました」

「ごめんなさい、研究所のほうで少しトラブルが・・・」

と、上から禁書目録、御坂美琴、御坂妹、打ち止め、神裂香、風斬氷華の六人が来て

その後

「少し待たせたかい？」

「すいません、遅くなりました」

と、何故かステイル^{エツアリ}、マグヌス、海原光貴がたっていた

「おっそかったわね」

「いや、男手が必要だと思つてステイルと海原を呼んで来たんだけど・・・高等部にはコイツラが居たはね・・・」

「なんだ？二人とも俺らみたいに脅されたのか？」

「いいえ、自分等は御坂さんたちが来てくれつていうから、来ただけですよ」

「よく断らなかつたな」

「御坂さんの頼みごとを、自分が断るはずないでしょう」

「僕があの子の頼みを断るはずないじゃないか」

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

四人が（お前等どんだけだよ・・・）という目を向けていると

「そんな目しないでください、貴方達だって自分の好きな人や好きなタイプの人から頼まれたら断れないでしょう」

「なっ・・・僕は彼女（禁書目録）にそんな感情は／／／・・・」

「へえゝそうなんだあｗｗｗｗ」

「へえゝそうなんかあｗｗｗｗ」

「き、つきみたち！何が言いたいんだ」

「いや、べつつに何も無いよな青髪」

「そうやで、べつつに何も思っていないで。なっ、かみやん」

と二人は言っているがその顔は間違いなくにやけていた

と、青髪と上条がステイルをそうやってからかって遊んでいたときに、土御門と一方通行は先ほど、海原のいった「貴方達だって自分の好きな人や好きなタイプの人から頼まれたら断れないでしょう」のことで土御門は自分の義妹の舞夏で、一方通行は打ち止めで考えた

「確かに、断れないにやー」

「あア、死んでも守るなア」

その二人の言葉に

「お二人とも、お分かりいただきましたか」

「ああ、お前が断れないのも無理はないにゃー、あんなので頼まれ
たら、絶対に断れないぜい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

海原が今の言葉に固まってしまった

「堕天使エロメイドの格好で・・・あんな頼み方は反則だぜい！」

「どんな妄想してるんですか！」

「え？どんなってそりゃあ、舞夏が堕天使エロメイドを着てくれて・
・もうっいいです。聞いた自分が悪かったので」

「いやいや、こっから凄くなるんだから。まあ、聞けよ」

「なんでどうでもいいときに真面目な口調になるんですか！」

「舞夏の堕天使エロメイドがどうでもいいだと!？」

「どうでもいいですよ」

「じゃあ、御坂美琴が堕天使エロメイドを着るのはどうでもいいの
かにゃー!？」

「どうでもよくないに決まってるじゃないですか！」

「コイツら、もう末期だな」

「じゃあ、一方通行は打ち止めが墮天使エロメイドを着ているのはどうでもいいというのかにゃー!？」

「どうでもよくねエに決まッてンだろオが！」

「なら、貴方も自分等と同じ末期ですよ」

と、グループ（約一名除く）が騒いでる横では

「だから、僕はあの子に恋愛感情なんて持ち合わせてないんだ！」

「はいはい」

「本当にわかっているのかい？君達は」

「わかつとる、わかつとるって」

「なら、ニヤニヤ笑わないでくれるかな？」

「いやゝ、だってなあかみゃん」

「うんうん」

「そんな動揺しながら答えても説得力0やからな」

「だよなゝ」

「やっぱり分かってないんじゃないか！」

「気にすんなって」

「気にするよ!」

上条と青髪がステイルをからかっていた

しかし、男子たちがそうやって遊んでいると……

「ちょっと、アンタたち!」

「なんですか? 御坂さん」

御坂の声にいち早く反応した海原……さすがですね

「作戦会議だよ! ってミサカはミサカは言ってる」

「作戦会議だア?」

「はい、話は先ほど吹寄さんから聞きました。佐藤、と言う人をどのようにして呼び出し、私達の盗難物をどのように確保するのか、ということをお話し合います」

「なるほどな、で、作戦会議っていうけど、作戦とかは考えてあるのかにゃー?」

「作戦についてはもう考えてあります。と、ミサカは簡潔に答えます」

「考えてあるんやったら、作戦会議はいらんとちゃうん?」

「作戦会議っていうより、役割を決めるっていったらいいのかな？」

「役割ってなんのだい？」

「それを。今から話す。だから座って」

姫神がいうと、皆一つの大人数が座れるテーブルについた

「で、役割ってのは何なんだ？」

最初に口を開いたのは上条だった

「役割っていうのは貴様等男子の役割よ。男子には三つの役割に分かれてもらうわ」

「まず一つは、誘導係。これは佐藤を私達が指定した場所に連れて行く役割になるんだよ」

「この役割の人は、もしルームメイトがいたのならその人物も一緒に連れて行ってください」

「そして二つ目が、探索係になります。この係は佐藤さんの部屋から私達の盗難物を探索して、押収する役割になります」

「そして最後が戦闘係です。戦闘係というのは、もし犯人がこの計画に気づいてしまっただけで能力でこちらにはむかって来ただけの場合にその役割の方達に応戦してもらいます。と、ミサカは懇切丁寧に説明します」

「それで、その役割はどうやって決めるんだア？」

「決めるっていうかもうこっちで決めちゃったのってミサ力はミサ力は言ってみる」

「へえ、それで僕等はどんな役割なんや？」

「それを今から話す。まず。誘導係は土御門くん、青髪くん。探索係はステイルくん、海原くん。最後の戦闘係は一方通行くんと上条くん」

「何で俺が戦闘係なんだよ!？」

「僕は探索係がいいわ!！」

「俺だって探索係がいいに決まってるにやー」

と、^{デルタ}フォースの三人は女性人に向かって講義をする

「土御門と青髪は佐藤と顔なじみなんだから貴様等じゃなきゃおかしいじゃない、それに盗難物に手を出さない確証がないから却下」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

青髪と土御門は黙ってしまった、どうやらマジで手を出すつもりだっただけらしい

「それと、上条は相手の攻撃を貴様の右手で打ち消してもらわなきゃいけないんだから却下に決まってるでしょ」

「それって、盾になれって言うことじゃねえかよ」

「あら、そう聞こえなかった？」

「お前なあ……ま、いいけど。でも俺、佐藤の能力知らないんだけど」

「それは先ほど調べました、とミサ力は胸を張って言います。佐藤きよたか清隆レベル3の風力使いです。と、ミサ力は補足説明をします」

「よりいもよって風力使いかよ……」

「大丈夫よ。怪我しても姫神さんが応急処置してくれるから」

「そついう問題じゃねえよ！」

「じゃ、作戦を言うはね」

「え？ちよつと吹寄さん、無視ですか？シカトですか？」

「うっさいわよ上条、どうせもう決まったことなんだから、諦めなさい」

「うっうっうっ……分かったよ！やります！やるよ！やればいいんだろ三段活用！」

「分かればよろしい。それじゃ、作戦を言うわ

まず誘導係の土御門と青髪が佐藤を私達女性がいるところまでつれてきて頂戴、さつき神裂さんが言ったとおりにルームメイトも一緒にね」

「つれてきたらどうするんだにゃー？」

「ショッピングとかで相手を足止めするの、その間にステイルと海原の探索係が部屋を搜索して、私達の盗難物を確保、そしてたら私達に電話して」

「分かりました」

「そして戦闘係の上条と一方通行は、私達の近くでショッピングでもしておいて」

「一緒に買い物すればいいじゃねエか」

「それだと、相手が怪しんだりするかもしれないでしょ」

「男二人でショッピングって……」

「まあ、いいじゃない。それじゃ、上条と一方通行はコレをもっている」

そして吹寄が差し出したのはトランシーバー（二個）だった

「何でトランシーバー？」

「こちらの状況が分からないと貴様等だって手出しの仕様がないでしょ」

「なるほどな」

「それじゃ、あんた達、寮に戻って」

「何で寮に戻らなきゃいけないのかにゃー？」

「寮に戻って荷物をおいた方がいいでしょ」

「そりゃそうやけど」

「それに。どうせ。一度は寮に行くんだし」

「そうだね。じゃあ帰ろうか」

「じゃ、作戦決行時刻は午後六時よ、土御門と青髪はその時刻に佐藤を連れてセブンマートに集合よ。じゃ、解散！！」

作戦会議〜第六話〜（後書き）

アイテム・スクール・グループはこの学校では何でも屋のようなものをしています

その活動内容は主に生徒や教員の依頼があれば、落し物捜索からいろいろあります

そして、何故分かれているのかというと、部活動ではなくてボランティアのようなもので、報酬なしで休みなしのはあまりにもひどいので、一週間ずつの交代でやっていくのです

そしてボランティア精神の皆無な人たちが何故入ってるのかというと、レベル5の中からくじで決まり、その他は統括理事会が決めることになっています。

つまり、本人達はいやいややってるのです

それでは今回はこれにて次回で盗難事件ラスト！……の予定です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7931m/>

とある上条の学園生活

2010年11月28日01時43分発行